日本現代文學全集・講談社版 84

上林暁
外村繁 集
川崎長太郎

日本現代文學全集
84
上林暁・外村繁・川崎長太郎集

編者
伊藤整
亀井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和40年9月10日　印刷
昭和40年9月19日　發行

定價　500圓

© KŌDANSHA 1965

著者　上林暁（かんばやしあかつき）
外村繁（とのむらしげる）
川崎長太郎（かわさきちょうたろう）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衛

發行所　株式會社講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話東京（942）1111（大代表）
振替東京3930

印刷　寫眞製版印刷
製本
製函
背皮
表紙クロス
口繪用紙
本文用紙
函貼用紙
見返し用紙
扉用紙

落丁・亂丁本はお取りかえいたします。

上林曉集目次

卷頭寫眞

筆蹟

薔薇盜人……七

安住の家……一三

明月記……二七

小便小僧……四一

晩春日記……四六

聖ヨハネ病院にて……五五

開運の願……七三

姫鏡臺……八一

泰作咄……九一

光明院の鐘の音……一〇〇

春の坂……一〇六

御目の雫……一一三

白い屋形船……一三四
作品解説……瀬沼茂樹　三七四
上林暁入門……淺見　淵　三八一
年　譜……三八八
参考文献……四〇九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

外村繁集目次

巻頭寫眞

筆　蹟

鵜の物語……一三三

紅葉明り……一五五

夢幻抱影……一六四

岩のある庭の風景……一七四

澪　標……一八四

日を愛しむ……二三八

作品解說……瀨沼茂樹　三七六

外村繁入門……淺見　淵　三八三

年　譜……三九五

參考文獻……四一三

川崎長太郎集　目次

巻頭寫眞

筆　蹟

無　題……二五七

路　草……二六五

その一　穿　その二　隻脚

その三　泥　その四　路草

裸　木……三一四

落　穂……三三〇

僞遺書……三四一

鳳仙花……三四七

船頭小路……三五五

作品解說……瀨沼茂樹　三七九

川崎長太郎入門……淺見　淵　三八五

年　譜……四〇一

參考文獻……四一四

上林曉集

江東に
豪雨の報
あり
一白日紅
上林暁

薔薇盜人

校門際のたつた一株の痩せた薔薇、然もたつた一輪咲いた紅い薔薇の花が、一夜のうちに盜まれてしまつた。鋭利な刃物で剪つたのではなし、延びた爪で、摘みきつてあつた。朝になつてみると、柔い切り口はもう黒く萎びてゐた。花のなくなつた枝や葉のうへを、蟻だけが所在なささうに、でも忙しさうに這ひ廻つてゐた。

朝つぱらから學校中が大袈裟な騷ぎになつた。朝禮の時、全校の生徒を集めて、校長が亢奮した口調で嚴格な訓辭を與へた。たとへ一莖の薔薇の花であつても、折角可愛らしく咲き開いた花には朝夕水をかけてやるだけの奥床しい心掛けがなくてはいけない。それをまた盜み取るなんてことは、動物や植物を愛護しないばかりでなく、愛校心にもとるものであると極めつけた。しかし一旦過ちを犯した人は今更仕方がないから若し萬一皆さんのうちに、あの薔薇の花を折り取つた人があるなら、正直に包み隱さず、あとで受持先生のところまで申し出て下さいと結んで、二十分に近い訓示を終つた。

もともと櫻の木が自慢の野なかの小學校である。櫻の木ばつかり五十本ほどが、學校のぐるりを取り卷いてゐる。毎年三月の卒業式には來賓といふ來賓がかならず窓の外を飛び散る櫻吹雪を指さして、生徒たちの前途を祝福するのである。それが、今日この頃は若木も古木も見事な葉櫻になつて、紅黒く熟れた櫻ん坊が地一面に落ち散り、生徒たちの足の下に蹈んづけられてゐる。それらの櫻の木を除いては、木らしい木は一本もない。強ひて何かの木を求めるならば——それが校門脇の痩せた薔薇の一株なのだ。だからこそその薔薇の株に花が一つ咲いたとなれば學校中から珍花のやうに愛翫せられるし、折り取られたとなると、かけがへのない貴重なものが喪はれたやうに學校全體の騷ぎとなるのである。

終日教員室の話題にもなつたし生徒達の間でもいろいろ取沙汰されたけれども、「先生私が折りました。」と申し出るものは遂に現はれなかつた。

仰け反つて大人を見上げる子供のやうに、仰け反つて咲いてゐた花がなくなつたので、油蟲さへもう薔薇の莖を見捨てた。そのづんぼら坊主の薔薇の株を見てかへりながら先生も生徒も、あの紅い花はどこへ捨てられたんだらうと、心の隅で考へた。明日の朝、朝日が照つても、露に濡れた花はもう輝かない。……

學校の庭に咲いてゐた眞紅の薔薇の花は、昨夜から仙一の家の座敷で萎びつつあつた。もつと正確に言へば、仙一の妹の由美江の胸の上で萎びてゐた。

由美江は五つになる女の子である。由美江はお父やんの縞の袷を着てじくじくに破れた古疊の上に寢ころんでゐる。お父やんの着物は由美江の手も足もすつぽりくるんでしまつて、餘つた袖口は垂れ下り、裾は塵に引き摺つてゐた。その上垢でじつとり重たく縞目もわからない。その垢染んだ着物の胸に、まつ紅なバラの花を徽章のやうにくつつけて、仰向けに寢轉がつてゐるのである。夜になつても電氣燈は勿論洋燈も蠟燭もつけず眞つ暗なまま、晝でも薄暗いこのあばら家のなかで薔薇の花だけが、派手な、それだけ不氣味な强い色彩で耀いてゐる。だが花が萎びるにつれ、その耀きもだんだん衰へて行くのだつた。

五年生の仙一は皆からはぐれ、急いでかへつて來た。先生や生徒たちの顏がみんな恐ろしく、それに追つかけられるやうな氣がして、われ知らず走つてゐた。家のなかへ這入つて來ると由美江の胸

につけた薔薇の花が一時にくわつと耀やくるめいたやうな氣がした。頭が痛んだ。彼は自分が盜んだ薔薇の花を恨んだ。

由美江のそばへ寄つて行くと、由美江はぱつちりと眼を開いた。薩摩芋のやうにいびつに赤肥りした大きな顏の端つこのはうに、飯粒のやうに白くくつついた小さな眼である。いま隣村の芝居小屋に掛つてゐる芝居で子役が欲しくなり、座長と差配とが由美江を買ひに來たのであつたがどんなに顏をつくつてみたところで舞臺には立てないといふので相談が成り立たなかつた。子役にも買はれない顏……眠つてゐるとばつかり思つてゐたのに眼をあけたのは、眼をあけてるのが大儀だから、ただぼんやり閉ぢてゐたのであらう。

「いや、いや。」と由美江はだぶだぶの着物のなかで身をもがいた。だが仙一は、縫目に挿し込んだ花を素早く抜き取ると、一ひら一ひら丹念に花びらをむしり取り最後に蕊も花びらも一緒くたに手の中で揉み圓めて、暗い土間を目がけて投げ捨てた。

由美江は悲しげな表情をして兄のすることを眺めてゐたが、諦めたのか泣きもせず、そのままに又靜かに眼を閉ぢた。ゆうべ、バラの花を胸に挿してやつた時には弱々しいけれども抑へることの出來ない喜びを、その疲れた瞼に浮べたのであつたが、今はもうその影は跡型もなく、瞼はもとのままに疲れてゐた。

奥の方の壁際で、鴛鴦蒲團のなかでからだをくねらせながら、父親の喜八が咳をした。

咽喉につまつた痰を吐き出す咳であつた。喜八は仙一の方をちらと見たけれども、何も言はなかつた。

仙一は學校の荷物を拋り出すと、由美江と利江の間へごろつと身を投げた。利江は七つになるのである。由美江も利江も碌に飯が食へないのに、由美江は芋のやうに肥り、利江は骨と皮に痩せ細つてゐる。利江の痩せ細つたのは飯を食はないせゐもあるが犬に對する恐怖病にもよるのである。利江は外を歩いてゐても犬ばかり警戒してゐる。夜なかに突然泣き喚くことがある。「犬が來た犬が來た。」と言つて胴慄ひするのである。利江は仙一が鰯釣りに行くときの腰巾着である。仙一が釣竿と蚯蚓箱を提げ、利江が魚籠を提げて川へ行く、仙一が自分の背丈よりも長い鍬の柄を持つて野原で蚯蚓を掘つてゐるときには、かならず利江が蚯蚓箱を持つてそのそばに蹲んでゐるのであつた。

利江も鴛鴦にくるまつて寢てゐた。利江と由美江の間へ身を投げた仙一も鴛鴦をひつ被つて、日はまだ高いのに眠る準備を整へた。からだがひどくだるい。今日も晝飯は食はなかつた。夕飯も食べられさうにはない。

夕方が來て、三人の子供たちが眠に陷つてゐる時、喜八はやつと床から這ひ出し、晩飯代りに芋をふかした。米は一粒もない。——

喜八がなまけ者の極道者であるといふ世間の非難は一應當つてゐる。殊に去年の夏働き者の女房お由布が死んでからは、嫌でも應でも二人前の仕事をせねばならないはずなのに、なんにもせずにごろごろしてゐるところから見れば強ち世間の非難を斥けることは出來ない。

だが世間の非難も少しは酷なやうだ。現に喜八は左手の指が生れつき四本しかないのだ。

中指が一本足りない。なるほど見かけはがつしりした大きな骨つ節だ。けれども缺陷をもつた彼の病質な體軀のなかには、恐らく濁つた血が流れ、頭はいつも重く、からだの蕊はいつも病んでゐるにちがひない。そのために彼は働くことが嫌なのだ。その上彼が三十代までは、親爺と一緒に自作してゐた同じ田地を、四十代の今は小作をしてゐるのだ。張り合ひがないつたらありやしない。彼はふて寢をはじめた。と同時に、いよいよ親子四人が飢餓に曝されることになつた。芋ばつかり食つた。時々親類の者が米を持つて來て呉れることはあつた。近所から繭の蛹を貰つて來て醬油で煮〆て食つたこともあつた。鷄は卵を產んだ。すると仙一が、生みたての卵を提げて菓子屋へ走つて行き、瓦煎餅や卷餅に替へて來た。それをみん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なが分けて食つた。（菓子屋では卵をまた菓子に使つた。）だが、毎月五回だけはきまつた收入が彼にもあつた。十五になる娘の富江が伊勢の紡績から送つて寄越すのだ。富江は死んだお由布の連れ子で喜八の家へ母親と一緒に來た時はまだ赤ん坊だつた。その富江の仕送りが今は家内中のただ一つの賴みの綱なのだ。

喜八は寢ころびながら、それでもときどき「青年」の頃を思ひ出すことがあつた。彼も若い時はなかなかの洒落者であつた。赤い絹絲を桃色珊瑚の緒〆めで締めて、桐の胴亂を腰に下げてゐた。雨の夜は、蛇の目の傘をさし、蔦の葉の模樣などを描いた女用の先革をつけた足駄を穿いて娘のうちへ遊びに行つた。ふところには「孝子五郎正宗」といふ講談本などを入れてゐた。そんなにして洒落のめしてはゐるが、どこかしら間の抜けたところのある洒落者であつた。むごたらしく言へば、指一本足りない肉體的缺陷を、あらゆる扮裝で補はうとする悲しいお洒落だとも思はれた。そして彼のお洒落がどんなに間が抜けてゐたかは、四本のうちの藥指にあたる肉太の指に、金鍍金の指輪を誇らしげにきらめかせてゐたではないか！

喜八はやがて湯氣の立つ芋を小笊に移し、それから三人の子供たちを揺すぶり起した。子供達は笊を目がけて這ひ寄つた。喜八は又床の中へもぐり込んだ。

そのあくる日の放課後仙一は教員室に殘されて、受持の松原先生と向ひ合つて立つてゐた。

仙一の薔薇盜人が暴露したのだ。

松原先生は耳から膿が出るので綿を詰め込んで、袴をはいてゐた。仙一は先生の顏を見たり、先生の背後の壁に凭せかけた日露戰爭分捕品の錆び鐵砲を見たりしてゐた。

仙一が教員室に留め置かれたのは、これで何度目かであつた。そのうちでも目星しいのは、卵買ひの助さんの荷籠を揺さぶつて、卵を三十ばかり潰した時。助さんは薄野呂で、子供達から馬鹿にされてゐたが、その時ばかりは學校へ捻ぢ込んで來たのだつた。その次は、路傍の干大根へ（男、女、男、女）と落書した時。洗ひたての白い干大根がずらりと懸け並べてあつたのが、書き方の時間を終へてかへつて來る仙一たちに落書の魅力をさそつたのだつた。

さて、松原先生は額に筋を立てて向ひ合つてゐたが、いきなり鞭で仙一の頭をぴしやりと打つた。仙一はよろめいた。固形物のやうな涙が一つころりと落ちた。

「寺田君は薔薇の花を盜んだな。」

「はい。」先生の劍幕があまり高壓的だつたので、仙一は思はず簡單に白狀してしまつた。

あの日夕方、仙一は鎌を持つて、釣竿にする竹を切りに山へ行つたのだ。かへりに學校のそばを通ると、急に薔薇の花が欲しくなつた。自分が欲しくなつたと言ふよりも、うちで寢ころんでゐる由美江の胸に挿してやりたいと思つたのだ。それは、あのあばら屋のなかで華やかな色彩に飢渴してゐたところから來た慾望であつた。そこでふらふらと摘んでしまつた。——夕方學校のそばをうろうろしてゐた仙一の姿を見掛けたといふものが出て來て、仙一に疑ひがかけられ、それが的中したのであつた。

「盜んだ薔薇はどうしたかね。」先生の聲は少し和らいでゐた。

「由美江にやりました。」

「由美江といふのは誰かね。」

「妹です。」

「妹はよろこんだか。」

「よろこんだことアよろこびましたが……。」

「それがどうした。」

「握飯や燒飯貰うて來た時にや、かなはんと思ひました。」

その時松原先生の頭にはバラ盜人としての仙一よりも、缺食兒童としての仙一の姿が、強く頭に浮んで來た。

「君は晝飯食べたか。」

「食べません。」

「朝飯食べたか。」
「隣のをばさんに燒飯貰ひました。」
「腹は減らんか。」
「減りました。」
額がおでこで、一種岩石のやうに頑固さうな顏つきをした仙一ではあるが、今そこに立つてゐる仙一には、どこかしら打ち萎れたところがある。試みに彼の着物を剝ぎ取つてしまへば、腹が病的に膨れ、胸が落ち窪んでゐるにちがひない。彼は朝禮の時でもぶつ倒れたことが度々である。食べものらしい食べものによつて、彼のからだが保たれてゐないせゐだ。
「仙一、飯食うたか。」朝萎れきつて學校へ出掛けて行く仙一を、隣のをばさんたちが呼び止める。
「食はん。」仙一はかすれた、憐れつぽい聲で答へる。さうすると彼は呼び入れられて、一杯か二杯の御馳走になる。
或る朝は、「仙一、飯食うたか。」と呼び止めると、「食うた――」と一聲殘し、昂然として學校へ出かけるのだ。一杯か二杯か、うちで食つて來ただけで、それだけ元氣が出るのだ。だがそんなことは近頃滅多にない。
松原先生は今目の前にゐる仙一を見てゐると、また卒倒しやしないかと心配になり出した。
そのうへ最初に殿りつけたことが、暗い自責となつて蘇つて來た。
「以後、花なんか盜んぢやいけないぞ。」
「はい。」
「バラの花が欲しけりや」と言つて先生は窓の外の野原を指さした。「いくらでもあるぢやないか。」
窓の外は、黃色く熟れた一面の麥畑である。麥畑の間を縫つて、野川がうねうねと流れてゐる。その川岸や河原には、今が野茨の眞つ盛りである。石橋へ出る小路のところでは、茂り合つた茨がトンネルを作つてゐて、學校へ來る子供達は花の香に咽びながらその下を潛るのである。蝶や蜂や虻がその間を唸り廻つてゐる。
その野茨の花を摘めばいいぢやないか、と松原先生は言ふのである。しかし仙一には、野原に咲く白い茨の花なんか、ちつとも綺麗だとは思はないのだ。その時仙一は、自分が盜んだ紅いバラの花を一瞬思ひ浮べたのだが、その花はすぐほかの、も少し大輪の紅いバラの花に變つて行つた。それは、薄桃色のだらりとした洋服を着た三十くらゐの女の人の胸に挿されてゐた。厚化粧をしてゐたが、膚はひどく荒れてゐた。それが變になまめかしかつた。その女の人は、肥後の熊本から清澄丹といふ腹藥を賣りに來た樂隊のなかの一人だつた。村の辻で人集めの音樂が一通りあつたあとで、赤い唇をしたその女の人が爪立ちながら、あだな聲で藥の效能を說いた。その胸に燃えてゐた紅いバラの花だ。仙一はなぜかしら、その女の人とバラの花を思ひだした……。
だが仙一は、野茨の花を摘めといふ松原先生の提言に對しては、素直に「はい。」と答へた。
「ぢやア、もう歸つてもよろしい。」
仙一は頭を下げた。
それから鼻緒のきれた藁草履をぶら下げ、徒跣で學校の門を飛び出して行つた。
「仙一、學校のバラの花盜んだね。」夕闇のなかで、父親の眼玉がぐるりと光つた。――
あれから二、三日たつてゐた。喜八の耳にもうはひつてゐるのだ。
仙一は默つてゐた。
「盜んだね。」
仙一はまだ默つてゐた。
「おい返事せんか。」喜八の聲は急き込んで來た。
「うん。」仙一は口のなかで仕方なく返事した。

途端、寢床から飛び起きて來た喜八は、仙一の横つ面を張り飛ばした。仙一はよろめき倒れた。倒れると同時に、涙と泣き聲が噴き出した。

「ぬすつとするやうな奴は出て行け！」

喜八は倒れてゐる仙一を横抱きにすると、土間の闇のなかへ拋り出した。仙一は土に嚙みついて泣いた。

寢てゐた二人の妹も上半身だけ起して泣きはじめた。

「出て行けと言うたら出て行かんか！」喜八は朽ちた床が抜けるほど地團太を踏んだ。仙一はまだしやくり上げながら、野良猫か鼬が人目を掠めて走り去るやうな恰好をして走り出て行つた。

外に出ると、十三日か四日の月が竹藪の上に大きく出てゐた。竹の葉先で月の面が掃かれる具合になつて出てゐた。月を見ると仙一はふと泣き止んだ。それから又しやくりはじめた。

彼は徒跣で自分の影を踏みながら、村のなかの道を當途もなく歩いて行つた。薔薇の花を盜んだことを、父親がどうして知つたんだらうなどとは、彼は考へなかつた。薔薇の花のことなんかもうちつとも考へなかつた。夜のなかに、たつた一人ほつぽり出されたことが淋しくてたまらなかつた。

仙一は歩いてゐるうちに花火の音を聞きつけた。隣村の芝居小屋から打ち上げた花火の音だ。すると仙一は、芝居が見たいなアと思つた。

道夫の家のそばまで行くと、道夫は白い塀の上に内股に乘つて、塀のうちの菜園でもいだ胡瓜を嚙りながら、月を眺めてゐた。道夫は助役の息子で、餓鬼大將仙一の手下の一人で、三年生である。

「道ちやん。」仙一は塀の下から實に懷しげに聲をかけた。

「よう。」と言つて、道夫は下を見おろした。

「道ちやん、そこで何しよら？」

「なんにもしよらん。」

一寸間、おいてから仙一が言つた。「道ちやん、芝居見いに行かんか。」

「お母さんが錢呉れんもん。」

「子供は錢がいるもんか。ただで見れらア。」

「ほんまか？」

「ほんまとも……。」

「そんなら行かう。」道夫は塀から飛び下りた。

月の照つた改正道路を、二人の子供は隣村まで歩いて行つた。彼等の前や後にも、芝居を見に行く人がぽつぽつあつた。

「道ちやん、胡瓜みんな食うてしまふか？」と言つて、仙一が物欲しさうに道夫の方を見た。

「つべす（端）の方でよけりや、やろか。」

「かまん。」

仙一は分けて貰つた胡瓜を夕食だと思つた。

芝居小屋の入口まで行くと、木戸番が番臺の上に坐つて木戸錢を受取つてゐた。茣蓙や、座布團を持つた人たちがぞろぞろ這入つて行つた。春蠶のすんだあとで、案外入りがあつた。舞臺では頻りに太鼓が鳴つてゐた。

仙一と、道夫とは、人の流れにまじつて、木戸を這入らうとした。

「こりや、こりや。」木戸番が拍子木で二人の頭をこつこつ打つた。

「札買うたか、札買うたか。」二人は默つて木戸番の顏を見上げた。

「札がない者は這入つちやいかん。」木戸番が呶鳴つた。二人の子供は恨めしさうな顏をして後退りした。

野天で、板圍ひの棧敷に、兎も角も見物人が詰つた。性急な太鼓の音が鳴つて三番叟がはじまるらしかつた。入場者も杜絕えたので木戸は閉められた。二人の子供だけが、夜露に打たれて外に取り殘された。

二人の子供は、板圍ひの隙間に眼を當てて覗いてみたが、何一つ見えなかつた。ただ場内が樂しげなどよめきに滿されてゐるのだけ

が聞えて來た。

「仙一、去なうよ。」道夫が心細い聲で促した。

「去なう。」

二人は默つて板圍ひから離れた。その時、幕の開く拍子木の音が冴え返つて聞えたが、二人はただ心のなかで聞いただけで振り返らうともしなかつた。重なり合つた黒い影になつて、もと來た道を戻つて行つた。

「道ちやん、辻堂の方から去なんか。」と仙一が誘つた。辻堂には昔お堂が建つてゐたさうだが今はただ田圃のなかに墓地が廣がつてゐて、墓地のまんなかを村へかへる道が通つてゐる。

「改正道路の方から去なうよ。」

「墓でも恐ろしいことはないけんど、道が悪いや。」その實道夫は怖さに足が慄へてゐた。

「恐ろしいことはないぞ。」

「ずつと近道になるぞ。」

仙一が先に立つて、辻堂の方へ、すたすた歩いて行つた。道夫はびくびくしながら仕方なくあとからついて行つた。

墓石は黒い坊主頭のやうに並んでゐた。砂地は月の光で白かつた。砂を踏む二人の跫音が、遠くから人が來るのかと思はれるやうに響いた。墓地の中ほどまで來た時仙一は立ち止つた。そして、そこから五六間先にある墓を指さして言つた。

「おらんちのお母やんの墓はあれぞ。」

道夫はおづおづその方を見た。土饅頭に、ただ割石が一つ載せてあるきりの墓だつた。

雜草がぐるりに生え延びて、花のいつぱい咲いた紫陽花の木がすぐそばに立つてゐた。

仙一は母親の墓を道夫に指し示しただけで、そのまま歸りはじめた。わざわざ辻堂のはうからかへつたのも、ただそれがしたいばかりだつた。母親が死んだのは去年の夏の暑い日であつた。仙一は利江を連れて鰡釣りに行つた。

珍しく三才の鰡を釣り上げた。自分一人では釣り上げることが出來なかつたので、そばにゐた小父さんの人から掬ひ網で掬つて貰つた。

それを持つて揚々とかへつて來ると、町の病院へ入院してゐた母親が死んでかへつてゐた。

村はもう寢靜まつてゐた。道夫の家の前で、

「おやすみ。」

「おやすみ。」と言つて、夜露に濡れて、水泳ぎのあとのやうにぐつたり疲れて、二人の子供は別れた。

仙一は家へ戻つて、土間の戸をそつと開けようとすると、家のなかがなんとなく明るんで見えた。おや、と思ひながら這入つてみると、蠟燭の火が一本ほの搖れて、その光のそばで、父親の喜八が後光に包まれたやうな恰好をして、草履を作つてゐた。仙一の學校草履をもう二足も作つてゐた。

仙一が戻つて來たのを見ると、喜八は重い口で「芋食うて寢よ。」と言つた。

仙一は徒跣で座敷へ上り、芋を二つ三つ食つてから、利江と由美江の間へ割り込んで寢た。父親の影法師が煤けた壁の上で大きく搖れるのを見つめながら。……

（昭和七年八月）

安住の家

「日本一の大杉」と、福助たびの廣告のやうな看板が、向うの段々畠の岸に立つてゐるのが汽車の窓から見えて來た。大杉村と、村の名にまでなつてゐるその日本一の大杉も、山の中腹に一本立つてゐるところを見ると、なあんだ、と思ふほどだ。あの標識が立つてゐなければ誰も注意して見るものはないにちがひない。

「日本一にしては案外小さいね。」と一藤勇は窓の外を指さしながら、向ひ合つて坐つてゐる妻に言つた。

「景色の中にあるからでせうよ。そばへ行けばきつと大きいと思ふわ。」

「そりやさうだらう。」

そのあたりはもはや「嶺北」と呼ばれる地方であつた。縣境までに驛はもういくつもなく、汽車はすでに海拔高く登つて來てゐるのだつた。その朝七時に、彼等は四國の南の都會を立つて來た。そこでは青く透きとほるやうに冴えた空氣だつたが、ここまで來ると、日影は殆ど薄れ、淡い煙のやうな靄が谷合ひに罩めて、まだ午前なのに、もう夕方のやうな氣配だつた。それから間もなく、雪がちらちら落ちはじめた。——雪の降る圈内へ汽車が進入して行つたのだ。そして山間の小さな停車場の屋根に積んでゐる雪が、一つ增しに濃くなつていつた。

山脈深く入つた、材木を積んだ停車場で、リュックサックを背負つた男がスキイを擔いで降りた。その男は停車場に着く度に、プラットホームに降りては客車を移つてゐた。この南國に住みながら、いづれスキイかぶれした氣障な男だらうと思つてゐたが、驛の構内を出て、誰一人通るものもない雪路をとぼとぼ登りはじめると、不思議に淋しい姿に變つて見えて來た。

今は三月一日であつた。この土讃線は前の年の十月に開通したばかりで、いつも上京する時は、汽船で室戸岬を廻り、紀淡海峽を拔けて神戸に上陸するのだつたが、陸路から行くのはこれが初めてであつた。汽車は吉野川の流れに沿つて、いくつもいくつもトンネルを潜り、今右の岸にゐるかと思ふと、いつの間にか左の岸に渡り、又右の岸に移り、左の岸に渡つて進むのであつた。山も谷も樹木も崖も深々と雪に包まれ、川の流れだけが谷底深く碧で斫つたやうに鮮烈だつた。しかし座席にゐては、雪のちらちらする空間を隔てて向うの崖が見えるだけで、川の碧を見るためには、窓をあけ、頭を出して眞下を向かねばならない。

「そりや、川を見せてやらうか。」

一藤勇は急に立ち上ると、赤いマントを着て彼の横に坐つてゐた種子を抱へ上げた。

「ああ、見える、見える。」と種子は田舍訛りで叫んだ。それから弟の勝男をふりかへつて、「勝男ちやん、とつても怖いよ。」と吐息した。

「僕にも見せて。」と黒いマントを着た勝男も妻の横で立ち上つた。勇は腕に飛び込んで來た勝男を抱へて、「そりや見えるだらう。」と覗かせた。

勝男は座席にかへると、「あすこへ落つこちると死んぢやふんだよ。」と言つた。

子供が興味を持たうが持つまいが、彼等の印象に殘らうが殘るまいが、それは問題ではない。子供達に大歩危小歩危を見せてやつたことで勇は滿足だつた。それは彼の感傷なのだ。といふのが、今度の旅行は、遂はれるやうにして故郷を出、住む所がないやうな暗い

氣持で上京する途だつたから、せめて子供達だけには旅を樂しませてやりたいと思つたのだ。子供が大きくなつてから、お前達は大歩危小歩危を見たことがあるんだよと言つて雪の山や青い流れの話をして聞かせれば、たとへ子供達はなんにも覺えてゐなくとも、恰も雪の山や青い流れを見たかの如く感じて、彼等の追憶が愉しいにちがひないと勇は思つた。

勇は、重い不安な氣持で、トランクから出した本も讀む氣にならず、四國山脈の奥深く入つてゆく景色ばかり眺めてゐた。向うの崖の横つ腹を縫うて、危い國道が一筋走つてゐるのが見えた。鐵道が出來るまでは唯一つの交通路だつたのだが、今は雪に埋もれ、通る人もなく、廢れた道のやうに細々とつづいてゐた。一體どこへ通じるのかと思ふと、勇は滅入り込むやうな寂しさを感じた。かと思ふと、或る所では、一條の針金が崖と崖の間を通じて、向うの崖際に一艘の小舟が繋いであつた。この荒涼とした渡船場を見たとき、勇の寂しさは極まつた。今走つてゐる旅路を辿り辿つて行つて、東京へ達することが果してあり得るだらうかと思ふ疑念がふと湧くのであつた。それほどそこは別世界だつた。汽車は祖谷口などといふ驛を通つて行くのだつた。平家の落人の子孫が住んでゐる部落へはそこから入つてゆくのだらう。

妻の治子も浮かぬ顔で坐つてゐた。彼等はあまり話をしなかつた。妻も勇と同じ——或は彼以上に重い不安な氣持だつたのだ。彼等が故郷の村を立つたのは二月の初めであつたが、四國の南の都會にある治子の實家に二十日餘り滯在して、その日の朝やうやく上京の旅を繼いだのであつた。勇には前途の不安があつた。一體自分の運命はどうなるだらうか、と彼は思ひ煩つてゐた。一體自分の文學は、どんな獨創的、個性的、社會的な意義があるのだらうか。果して自分の文學は親子四人の生活を支へて行くことが出來るだらうか。自分のやうな貧しい才能で文學など志したのは間ちがひではなかつただらうか。それらの惱みは今に始まつたことではなく、又彼一人の惱みでもないけれど、故郷の家にゐた時、夜なかに眼ざめて起きるたびに、星の空を眺めながら、頭にかぶさつて來る問ひであつた。一言說明を加へれば、一藤勇は東京にゐて小說を書いてゐたのであるが、激しい作家生活のために身心共に萎え疲れ、からだは微熱を帶び、もはや一篇の小說を纏めあげるだけの氣力も失ひ、抑もなんのために自分は小說を書いてゐるかもわからなくなり、聲名も稿料も人並に得たわけではないのに、すべてがすでに空しく、故郷の親許にかへつて一と月經ち二た月經ち、爲すこともなく一年餘り暮してゐたのであつた。だがそのやうな生活が面白いはずがなく、人知れず日夜苦しんでゐるところへ、父や母からは穀つぶしのやうに思はれ、罵られ、人眼も噂もうるさいから早く東京へ行け行けと急き立てられ、逐はれるやうにして故郷を立つたのであつた。妻の實家へ行つてからも二十日餘りの間、あちこち遊びに行つたり御馳走になつたりしてゐながら、彼は遂に心から樂しむことが出來なかつた。故郷にゐた時感じた不安はいよいよ募るばかりで、じつと落ちついてゐることが出來なかつた。

そこへ持つて來て、或る霙の降る朝投げ込まれた號外は、東京に二・二六事件の勃發したことを報じた。それから數日の間、一藤勇は街をほつつき歩いて、板塀や電信柱に貼りつけられた號外を見て廻りながら、遙かに東京の空を望んだ。文學の暗黑時代が來たのではないかと彼は失望した。不安は不安ながら、折角志を固めてここまで出て來たのに、なんといふ不運なことだらうと彼は嘆いた。東京へ行つたつて仕方があるまい、このまま引つ返し、人に知られぬ作品を書いて生涯を終るよりほかないと、突き詰めて考へたりした。しかし樣子を見てゐるうちに、「兵に告ぐ」の大場面があつて、事態は鎭まつたらしく、彼等は三月一日を期して再び旅をつづけたのであつた。けれどもまだ安心がならず、東京驛を避けて、品川驛から新宿に出ようと決心してゐるのだつた。

かういふ社會の大事件も、女である妻には案外響かないらしかつ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com